

子育て支援に対する社会的ネットワークの効果的な活用の実証的研究

—ヒューマンネットワークと ICT の最適配分の理論—

代表研究者	小 倉 弥 生	神戸市看護大学看護学科
共同研究者	茅 本 善 子	神戸市立西市民病院
共同研究者	松 田 貴 典	大阪成蹊大学

1 はじめに

近年、保護者の持つ社会的ネットワークの広さが育児不安や育児ストレスの抑制要因として認識されるようになり、行政の子育て支援においては、地域の子育てサークル等の仲間作りの場を保護者に提供することが重要視されている。サークルに参加することにより、楽しみが生まれ、地域の人々と話をする事によって知識を得て、育児不安が軽減され精神的に満足していることは、様々なアンケートから明らかになっている。サークルに参加した保護者の傾向として、「保護者の生活にハリができた」や「子どもに遊び仲間ができた」といった内容が明らかとされており、子育て環境と保護者の育児不安との関連性や子育てのサポートについて検討された研究はなされている。しかし、子育て環境やサークルに関しては、実践的事例の報告に留まっている。そこで、子育て中の保護者に対してインタビューとアンケート調査を実施し、個人のヒューマンネットワークや地域内のネットワークの活用状況を明らかにする。さらにサービス利用者側としての視点から、サークル等の価値表明をしてもらい経済価値を測定することとした。保護者のネットワークが明らかとなり、客観的な測定に基づいた主体の最適な配分が明らかとなれば、地域を問わず行政の子育て支援政策立案に貢献しうると考える。

2 日本における子育てに関する概要

2-1 子育てに関する現状と活動

近年、子育てに関する記述によく「核家族化」「少子高齢化」「人間関係の希薄化」「育児不安」といった文言が使われる。子育てに関する課題として保護者の孤立や子ども同士の友だち作りの難しさがあり、その理由として、近所付き合いがあまりない場合や近隣に子育てをしている家庭がなく、地域の中での交流が持ちにくい状況が上げられる。しかしながら、子育てをしている保護者は、子育てに対して否定的な感情ばかりを持っているわけではなく、『子育てに関する意識調査』の結果によると、図1のように子育てに関して「子育ては楽しい」「子どもを持つことで親も成長する」といった意識が8割を超えている。

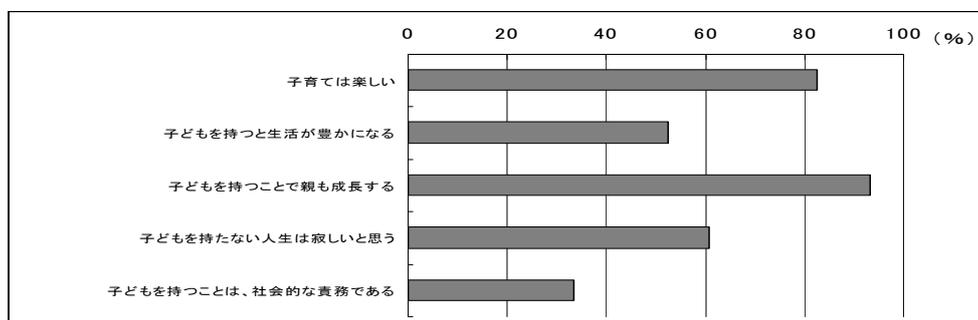


図1 子育てに関する意識

こども未来財団「子育てに関する意識調査」より作成

保護者にとって子どもを持つことは、幸せなことである一方、不安や悩みや負担が生じることも少くない。出生行動に影響を及ぼしている要因は、出産では子育てしながら就業できる見通しや仕事と生活の調和

の確保の度あいがある。そして第二子以降では、夫婦間の家事・育児の分担度あいや育児不安の度あい、経済的負担であるという要因が指摘されている。つまり家族だけでは解決できない課題も生まれることになる。

育児不安や負担に関して、厚生労働省が実施した 21 世紀出生児縦断調査の『子どもを育てていて負担に思うことや悩み』では、「子育てで出費がかさむ」が大幅に増加して、第 1 回調査以降多くなっている。次いで「自分の自由な時間が持てない」「子育てによる身体の疲れが大きい」「気持ちに余裕をもって子どもに接することができない」「仕事や家事が十分にできない」となっている。第 2 位以降の結果に関する保護者の解消方法は、保護者が子どもを連れて外に出る、さらに子どもと保護者の集まりで他の保護者と交流することで、気分転換となり軽減することも考えられる。

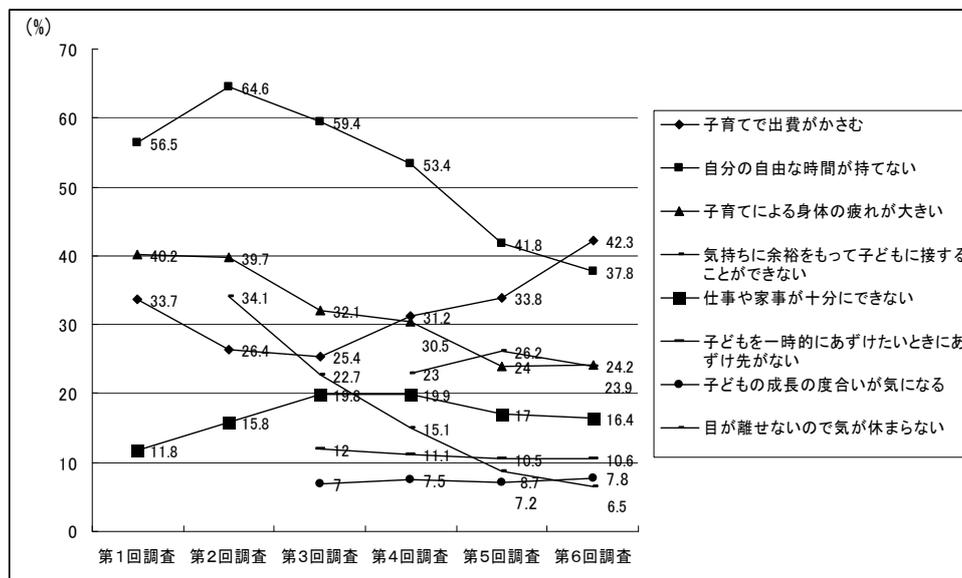


図 2 子どもを育てていて負担に思うことや悩み

出所：厚生労働省「第 6 回 21 世紀出生児縦断調査」より

つまり、保護者にとっては、子育て中の生活や子どもについて嬉しいことや悩みを誰かと共有することが、ポイントとなっている。そして子育てとは個々人のみでなく、他者と交流して影響を受けながら積み重なっていくものであり、さまざまな経験を通じて保護者と子どもの成長が継続されていくものであると考えられる。

2-2 地域における子育て支援活動

地域が子育てに関わる場として活動しているのが、「子育てサークル」である。子育てサークルとは、地域にある場所や施設を拠点に、地域住民が子育てに関する様々な活動を展開しながら、友だち作りと交流を図るものである。その参加者は、子育てをしている保護者と主に小学校就学前の子どもである。子どもたちが、自由に遊び、出会い、育つ場であり、保護者同士が交流や相談をするなど情報交換と情報収集の場となっており、その運営者は地域のボランティアや主任児童委員、民生委員、地域の関係機関の職員などが主体となっている。

3 子育て中の保護者の意識調査と分析

3-1 子育てサークルに参加する保護者の思い

(1) 調査概要

子育てサークルに参加している保護者に、子育てサークルに参加してから変化した友人関係やおよび保護者自身の感情の変化についてインタビューをおこなった。インタビューをおこなったのは、4つのサークルでそれぞれ 5~7 名である。

(2) 調査結果

表1に示すように子育てサークルに通うようになってから、地域に「地域で子育てをしている」「安心する」「視野が広がる」「友達が増えて嬉しい」といった地域への親近感と共に、自分自身の価値観と共に人的つながりが広がったと捉えていることがわかる。また、同世代だけでなく、子どもを通して他世代の人々との交流が生まれ、さまざまな情報が得られるようになったきっかけをサークルは作っていることも伺える。

また、「地域で子育てしている」カテゴリーには、『知っている人と出会う』『声をかけてもらえる』といった自分の生活の中で知り合いと出会うことが、地域の中で“つながっている”という感覚を生んでいる。「安心する」では『相談ができる』『気付ける』といった自分だけで考え、解決を目指すのではなく、周りの人に手助けを求める行動につながり、さらに周りの目からみた新たな気づきを得られることで、安心した日々の手助けとなっている様子が伺える。さらに「視野が広がる」では、『自分から声をかける』『気が晴れる』など自分からのアプローチをおこなうような積極性や、子どもを持つ保護者だからこそお互い共感しあえる機会を持つことで、さまざまな積極性が生まれ、自分から何かをおこなうといった行動にも現れている。そして「友達が増えて嬉しい」では「情報が得られる」「外出することの習慣になる」といった友人からのアプローチが交流を深め、さらに自分からのアプローチも生まれるといった相互作用が大きく働いている。

表1 子育てサークルに参加する保護者の意識

大カテゴリー	小カテゴリー	内容
地域で子育てしている	知っている人と出会う	・買物に行った時、よく声をかけてもらえるようになった。 ・毎日同じような時間に、近くの公園で自然と集まるようになった
	声をかけてもらえる	・世代の違う人と知り合いになり、久しぶりにあったときに声をかけてもらったことが嬉しい
安心する	相談ができる	・自分の子どもより年齢が上の子どもを持っている人と知り合いになり、子育ての相談ができて参考になる ・自分の子育てを認めてくれる人がいて、大丈夫だと思える
	気付ける	自分の子どもができていることを褒めてもらえると、こんな事もできていたのだと改めて気付いたこともある
視野が広がる	自分から声をかける	・電車に乗っていて子ども連れの人を見ると、何歳くらいだろうと考えて、声をかけることが多くなった。 ・自分より小さい子どもを持っている保護者に、自分から声をかけることがある
	気が晴れる	・「そうそう」と共感しながら話せる ・他の人の悩みを聞いたり話したりしていると、そんなに悩まなくても良いのだという気持ちになる
友達が増えて嬉しい	外出することが習慣になる	サークルに来てから、一緒に子どもを連れて出かけたり、お互いの家に遊びに行ったり、外出する場所が増えた
	情報が得られる	親子で出かけられるような自分は知らなかった新しい場所を教えてもらえる

筆者のインタビュー調査結果より作成

3-2 子育てサークルの参加によるネットワークの拡がりとその価値

(1) 調査概要

0～6歳の子どもを持つ保護者にアンケートをおこなった。内容は、サークル参加機関およびサークルを通して増えた友人の数、さらに自分自身の考えや行動に影響を与えた人の有無、そしてサークル参加1回あたりに支払っても良いと思う金額を問うものである。101人よりアンケート回答を得た。

(2) 調査結果

回答者の年代として20代が26.0%、30代が60.0%、40代が14.0%であった。また、子どもの数は、表2のように1人が59.4%、2人が34.7%、3人以上が5.9%であった。子育てサークルの参加期間は、表3に示すように、1～2年未満が24.8%、3～6か月未満が23.8%、2年以上が18.8%、6か月から1年未満が17.8%、3か月未満が14.9%であった。

表2 子どもの数

子ども数	人数	割合
1人	60	59.4
2人	35	34.7
3人以上	6	5.9

表3 子育てサークルの参加期間

期間	3か月未満	3か月～6か月未満	6か月～1年未満	1年～2年未満	2年以上
人数	15	24	18	25	19
割合	14.9	23.8	17.8	24.8	18.8

子育てサークルに参加してからできた友人の人数は、図5に示すように2～3人と4～5人がほぼ同じ割合で最も多く、次いで10人以上となっている。しかし0人という人も9.7%おり、地域の子育てサークルに参加したからといって全ての保護者に友人ができるわけではないことが示された。そして、図6ではサークル参加期間別にみた友人の増加数を示しており、平均で見ると参加期間が3か月未満では1.8人、3か月～6か月未満では3.7人、6か月～1年未満では3.8人、1年～2年未満では4.2人、2年以上では6.5人との結果が得られた。友人が0人の保護者は、1年～2年未満を除いた全ての期間において1～4名いたが、そのほとんどの参加期間は6か月未満であった。

子育てサークルに参加して、保護者の考えや行動に影響を与えた人は、「おおいにいる」「まあいる」をあわせると66%に達し、サークルで出会った人の中に保護者の考えや行動に影響を与えるほど、密にかかわりを持つ人とのつながりができていることが伺える。

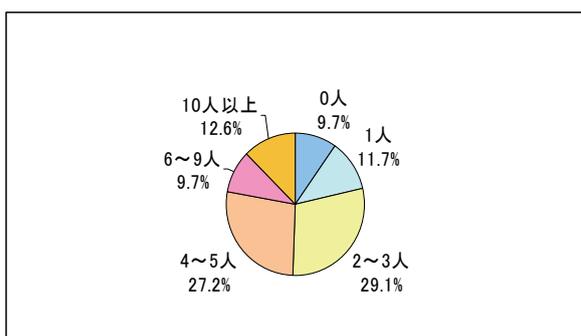


図5 サークルでできた保護者の友人の数

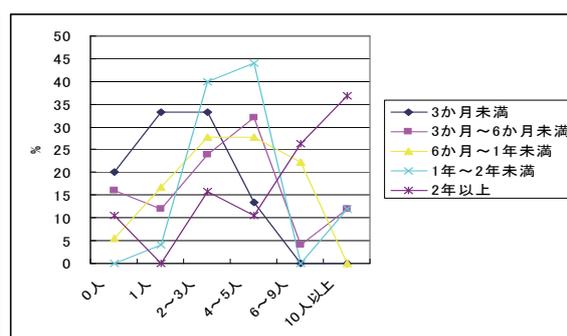


図6 サークル参加期間別にみた友人の増加数

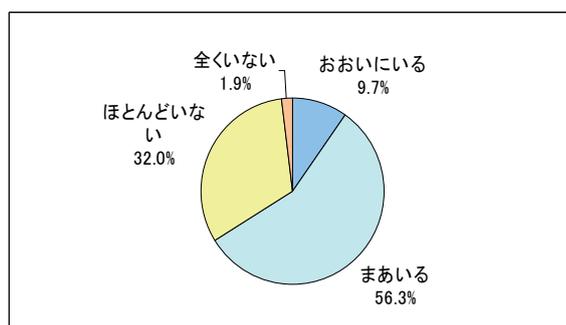


図7 子育てサークルの中に保護者自身の考えや行動に影響を与えた人がいるか (4段階回答)

子育てサークルは地域の人々によって開催されており、そのほとんどが1回当たりの参加費用を徴収していない場合が多いが、今回の調査にて支払ってもよいと思う金額を問うところ表4のような結果となった。101人中96人の回答を得た。全体の平均金額は725.5円で、20代の保護者では692.3円、30代では682.4

円、40代では992.3円であった。また、最小値は、20代と30代では0円、40代では100円、なお最大値はいずれの年代も3,000円であった。

表4 子育てサークルに参加するために支払ってもよいと思う金額（1回の利用料金：円）

		回答人数	平均	最小値	最大値
全体		96	725.5	0	3,000
年齢	20～29才	26	692.3	0	3,000
	30～39才	57	682.4	0	3,000
	40～49才	13	992.3	100	3,000

4 考察

4-1 子育て支援ネットワークが保護者に与える影響

(1) 子育てサークルの効果

子どもは、遊びを通じた出会いから友だちを見つけていき、保護者は、保護者同士で会話ができることや、楽しそうにしている子どもを見ること、サークルに来ることで出かける場所が増えることを嬉しく感じる。その理由の一つとして、自分の子どもだけでなく大勢の子どもたちを見ることによって、子ども一人ひとりの個性が違ふことや、子ども共通の成長を知ることにある。たくさんの子どもと触れ合えば、主観的に評価しがちな自分の子どもに対して、客観的にゆとりを持って見るができるようになる。他の子どもと接することにより、自分の子どもの新たな一面に気づき、よいところやできるところを改めて知ることになっている。さらに、保護者自身が子どもの遊ばせ方がわかるようになったり、子どもに新しいことをさせたりといった積極性も促され、人びとが集まって共に過ごす場があると、子どもは遊びを通して互いを理解する機会が得られ、保護者にとっては子育てのモデルを得ることができている。子どもが元気に遊ぶ姿は、大人たちの元気のもとにもなり、共に遊べる友人、安心して遊べる場、生活を見守ってくれる近所の知りあい、悩みを聞いてくれて解決の方向性のヒントを教えてくれる子育ての経験者が近くに感じられることは、日々の生活への豊かさや満足感に繋がっている。

さらに、保護者同士がお互いの子どもを認めあうことから保護者の交流が始まることもあり、自分の子どもだけでなく他の子どもの成長を喜ぶようになり、保護者同士で子どもを育てあう意識が芽生え、地域の子育てに対する責任感を感じるようになる。保護者の役割の中で特に子育てにおいては、具体的な形、つまり金銭的評価や賞賛といった評価がされにくい側面があるからこそ、保護者同士で共感しあい、育児の悩みや困り事を解消できるよう、実際的にも心理的にも保護者を孤立させない環境作りが必要になる。

そして、子育てサークルに来ることで保護者も子どもも友だちが増加して行動範囲が広がり、近所で偶然に子育てサークルで出会った友人が出会うようになることで、さらに積極的に外出するようになり、外出機会が習慣化されていくことが考えられる。

保護者を取り巻く現在の状況として、育児本やwebから容易に情報が手に入る昨今、情報過多によって、自分にはどんな情報が必要なのかといった判断ができない状況がうまれているが、実際の子どもたちの成長を目の当たりにすると、読んで知るだけでは得られない情報が積み重なっていく。これは、保護者の大きな学びとなり、こういった実際のやりとりは、本を読んだり講演を聴くよりも自分のものになっていく。このように大人も子どもと同じように、全身の五感をフルに使い、相手の表情や態度をキャッチして、その場の雰囲気を感じながら、交流を通して保護者自身の自信がうまれ、子育てに対する考えが変化し成長していく。

(2) 今後の課題

子育てサークルの運営者は、地域のボランティアや主任児童委員、民生委員、地域の関係機関の職員や社会福祉協議会の職員など多様であるが、特に地域の人々によって、サークルが運営されている場合には、その継続性が課題となっている。運営者の世代交代が行われない場合、継続した活動を行っていくことに困難が生じ、とくにボランティア活動として運営されている場合は、同じ人が永続的に活動を継続していくことは困難である。子育てサークルは、生活に密着した形で展開されているため、流動的かつ能動的な面を持ちあわせている。地域の中で子育てサークルがどんな役割を担っているのか、そしてどのような効果を生ん

でいるのか、地域の中での位置づけを常に考えていく必要性がある。

また、子育てサークルに来ることばかりがよい結果を生むわけではなく、子育てサークルにおける経験が生活に大きく反映され効果を生むこと前述した通りだが、全ての人に当てはまるわけではない。保護者の就業形態や生活スタイル、さらに各々の価値観によって、その他の場において同じような効果を得ている場合も考えられる。

5 おわりに

現在は情報が多いわりには、人の直接的な交流は取って代わらなければならない状況にもあり、とくに都市部ではそれらは顕著になっている。子育てサークルにおける子育て経験の価値は、地域の人びとができることを行いながら支えあい、成長しあうといった取り組みによって保護者だけではなく、生活や地域といった環境も含んだ人のつながりがもたれている。社会の変遷に合わせて、子育て支援の形式を変化させながら、継続した活動をおこなっていく必要がある。

さらに今回の結果から、今後より経済的な視点からの分析を続けていき、地域内における活動の分析と、ネットワーク分析をおこなっていくこととする。

【参考文献】

こども未来財団：子育てに関する意識調査，<http://www.i-kosodate.net/mirai/index.html>

厚生労働省：第6回21世紀出生児縦断調査結果の概況，

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/syusseiji/06/index.html>

柏木恵子，森下久美子（著）：子育て広場武蔵野市立 0123 吉祥寺-地域子育て支援への挑戦，ミネルヴァ書房，1997

北野幸子，立石宏昭（著）：子育て支援のすすめ-施設・家庭・地域をむすぶ-，ミネルヴァ書房，2006

東俊一：子育てサークルが母親に及ぼす効果，ノートルダム清心女子大学紀要(生活経営学・児童学・食品栄養学編)，32巻1号：99-107，2008

B・J・パインⅡ（著），J・H・ギルモア（著），岡本慶一（翻訳）：経験経済，ダイヤモンド社，2005

日本経済新聞社，産業地域研究所：子育て女性の消費事情-ワークライフバランスを目指す生活術-調査研究報告書 2008年